The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜文献紹介＞ シャンタル・ジャケ著『永遠の相の下に : スピノザにおける時間・持続・永遠性概念の研究』Jacquet, Chantal [1997] Sub Specie Aeternitatis : Étude des concepts de temps ,durée et éternité chez Spinoza (Paris : Édition Kimé)
Author(s)	小竹, 陽介
Citation	メタフュシカ. 2012, 43, p. 131-137
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/26498
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

《文献紹介》

シャンタル・ジャケ著

『永遠の相の下に：スピノザにおける時間・持続・永遠性概念の研究』

Jacquet, Chantal [1997] *Sub Specie Aeternitatis: Étude des concepts de temps*, *durée et éternité chez Spinoza* (Paris: Édition Kimé)

小竹陽介

はじめに

本著作は、スピノザ哲学[1]における永遠性 aeternitas・時間 tempus・持続 duratio といった概念について取り扱い、それら諸概念の内実を明らかにすることを目標としている。本著作は二部七章構成で、第一部は有限様態の永遠性の問題を、第二部は永遠性と持続の関係を取り扱っている。本稿では主に、第一部の第二章・第三章を取り扱う。この二つの章はスピノザにおける永遠性概念の研究において重要な問題の一つを取り扱っており、かつ本著作において最も先鋭な議論を展開している部分と思われるからである。『短論文』や『形而上学的思想』といったスピノザ初期の著作においては、永遠性は神的実体にのみ適用されるものであり、人間精神には不死性 immortalitas という語が当てられていた。ところが『エチカ』においては、様態にまで永遠性という概念が適用される。無限様態は実体と同様に永遠無限なものとされ（E1P21,22）、また有限様態は可滅的なものでありながらも、その精神の永遠な部分が残存すると言われる（E5P22）。永遠性がなぜ様態にまで適用されうるのか、また可滅的なものにすぎない有限様態がいかにして永遠でありうるのかという問題を、ジャケはこの二つの章で明らかにしようと試みているのである。

---

[1] スピノザのテキストの引用については、『エチカ』を E、『知性改善論』を TIE、『形而上学的思想』を CM、書簡を Ep とそれぞれ略記する。
引用に際して、『エチカ』では次のように省略している。E1, 2 etc. ＝『エチカ』第一部、第二部等、Praef ＝序文、Def ＝定義、P ＝定理、Dem ＝証明、C ＝系、S ＝注解、Ax ＝公理、Post ＝公準、L ＝補助定理、Ex ＝説明、Append ＝付録
『知性改善論』はブルーダー版による節番号のみを記す。
『形而上学的思想』は部と章を記す。
書簡は Ep と略記し、ゲブハルト版の続き番号を付す。

ゲルー「永遠性の再定義」解釈

ゲルーによれば、E1Def8[2] において無時間性 atemporalité として規定された永遠性は、無限様態に適用されるに伴い永続性 sempiternité という意味で用いられているという[3]。この二つの立場は永遠性に対する伝統的な考え方であり、前者はプラトン、後者はアリストテレスを起源とするものとされている。無時間性は、時間とは何の関わりもない不変不動な事物の存在様式を指す。一方永続性は、始まりも終わりも持たず、無限の過去や未来にわたって存在するような事物の存在様式を指す。

E1Def8Ex において、永遠性は持続や時間によっては説明できないものとされており、それゆえスピノザによる永遠性定義は、無時間性を意味するものであると考えられる。その一方、無限様態は永続的であるという意味において永遠と呼ばれているにすぎないように思われる。というのも、直接無限様態は、永遠であるとされながらも「常に存在する semper existit」（E1P21）と、また間接無限様態は「無限に変化しながらも同一にとどまる全宇宙の相」（Ep64）であると言われているからだ。そこでゲルーは、スピノザが永遠という語を一意的に用いているのではないのだから、実体と様態が同じ永遠性を共有していると考える必要はないと主張しているのである。たしかにそう考えることで、様態の永遠性についての問題は解決される。

しかし、ジャケはゲルーに対して反論する。実体と無限様態は同じ地位において永遠である。デカルトは書簡の中で、動的なものと不動なもの、この二つが各々有する存在が、互いに異なる本性を持つということを否定している[4]。この点に関して、スピノザはデカルトの意見を継承しているものと考えられる。事実、E1Def8 における永遠性定義は不変性を要求してはいない。それゆえ実体が無時間的なものであり無限様態が永続的なものであったとしても、それは永遠性の定義とは何の関わりもない。要するに、スピノザによる永遠性定義は変化する・しないといったことには関わらないのであって、「永遠性定義は無時間的なものであり、変化を許容していない」というゲルーの前提そのものが間違っているのである。このようにして、E1Def8 における永遠性定義は実体や無限様態に等しく適用可能なものであるとジャケは結論する。

E1Def8 における翻訳の問題

さらにジャケは、ゲルーの解釈を、E1Def8 の誤訳に由来するものと考える。ラテン語には冠詞が存在せず、それゆえ E1Def8 の「永遠な事物 res aeterna」を仏訳するとき、une chose éternelle とすべきか、あるいは la chose éternelle とすべきかという問題が生じる。ゲルーは後者[5]、マトゥロンは前者の立場をとっている[6]。前者を採用した場合、永遠性を様態にも拡張することができる。というのも、そのとき E1Def8 は以下の二通りに理解することができるからである。

---

2 「永遠性とは、存在が永遠なるものの定義のみから必然的に生じる限り、存在そのもののことと解する」

3 Gueroult, M. [1969] *Spinoza I: Dieu* (Hildesheim: Olms) p.81, p.309

4 アルノー宛書簡、1648 年 6 月 4 日付

5 Gueroult, op. cit., p.78

6 Matheron, A. [1972] “Remarques sur l’immortalité de l’ âme chez Spinoza” in Les *Études philosophiques*, Juillet-septombre(Paris: PUF)

1. ある事物の存在は、当の事物の定義のみから帰結すると考えられるかぎり、永遠である。
2. ある事物の存在は、他の永遠な事物の定義のみから帰結すると考えられるかぎり、永遠である。

ジャケはマトゥロンに従って、une chose éternelle と訳すのが妥当であると考える。その根拠は、『形而上学的思想』から『エチカ』への永遠性定義の変化にある。『形而上学的思想』では、永遠性は「本質 essentia」という語によって説明されている[7]。一方『エチカ』では、永遠性は本質ではなく、「定義 definitio」という語によって説明されている。スピノザは本質と定義をほとんど同義語として用いるが、この二つの間にはある大きな差異が存する。定義は、定義された事物の原因を示すことによって、その内在的な本性を明らかにする。つまり、様態の定義はその最近原因である神を含んでいなければならない（TIE96, E1P28S）。一方、本質の定義（E2Def2）からして、事物の本質には神は含まれえない。というのも、事物は神なしに存在できないが、神は事物なしに存在しうるからである（E2P10CS）。それゆえ、神は事物の本質には含まれず、事物の定義の中には含まれる。これが本質と定義の差異である。

以上から、ジャケは次のように結論する。E1Def8 においてスピノザが「本質」ではなく「定義」という語を用いた理由は明らかである。たしかに永遠性は様態の本質の中には含まれない。しかし、様態の定義は最近原因である神を含まなければならない。それゆえ様態が神を通して永遠な存在を享受することと、自己の定義によって永遠であることは同じ事態を意味している。従って、E1Def8 において「実体の本質」でなく「永遠な事物の定義」という語が用いられるのは、自己自身によって必然的な存在を有することのない存在者、つまり様態にも永遠性を認めるためであると理解することができる。

こうして、ジャケは永遠性の様態への適用が E1Def8 ですでに考慮されていると理解することができるものと考える。

永遠性と共通概念

永遠性が神の特権的独占物でないとすれば、それは複数の事物に共通な特質として理解されなければならない。それゆえジャケは、『エチカ』において永遠性が神にも人間にも共通であるためには、それが共通概念であるということが必要十分条件となると考える。

そこでジャケは、永遠性が神・無限様態・有限様態全てに妥当する普遍共通概念であると考える。根拠は四つある。

第一に、永遠性は様態の全体（無限様態）と部分（有限様態）に等しく含まれる。事実、人間は自己の精神の永遠性について、混乱した仕方であれ認識を持っている（E5P34S）。また

[7] 「しかし永遠性とは何か、またいかにして永遠性は神の本質を離れては考えることができないか…被造物あるいは神以外の一切物は常に神の本質のみによって存在し自己自身の力によって存在するのでない…神の存在は神の本質に属する…より適切に言うと、神には、無限の知性が現実的に属していると同様に無限の存在が現実的に属している。そしてこの無限の存在を私は永遠性と名づける。この永遠性は神にのみ帰せられうるのであり、いかなる被造物にも帰せられえない」（CM2.1）

E5P23S では「我々は自己が永遠であることを感覚し、かつ経験する」と言われているが、この「我々」は、全ての人間を区別なく包括していて、無知者を除外しているのではないと考えるべきであろう。それどころか、永遠性は人間精神に固有のものでなく、あらゆる事物の観念に共通である。というのも、全ての事物について、神の中に必然的にその観念が存在するからである（E2P13S）。それゆえ、そのような観念＝精神を与えられた全ての事物は永遠でなければならない。

第二に、永遠性は、個物の本質を構成しないという共通概念の条件を満たしている（E2P37）。永遠性は属性ではなく、それゆえ神の本質を構成しない。また永遠性はあらゆる様態に適用可能であるがゆえに個物の本質も構成しない。

第三に、永遠性は十全にしか把握されないという共通概念の条件を満たしている（E2P47, 47S, E5 後半部）。

第四に、「神の永遠性は万人によって知られている」（E2P47S）という文言は、永遠性が全ての精神に含まれているのでなければ不可能である。

以上よりジャケは、我々が神から受ける永遠性が、共通概念の一つに数えられるものであると主張する。ここで、皮相な解釈に落ち込まないよう注意する必要がある。E5P34S でも言われていた通り、精神が意識する永遠性は、常に表象と混同される可能性を持っている。「共通の意見」（E5P34S）とは、判明に認識されていない共通概念に他ならない。人間は精神の永遠性を意識しながらも、他の非十全な観念と混同することで、その本性を誤解するのである。賢者とそうでない者の差は、十全な観念と非十全な観念の混乱に由来する。それゆえ、認識能力によらず、全ての精神が平等に永遠性を享受する、ということにはならない。精神は全て、その認識能力に比例して永遠性を享受する。言い換えると、我々の精神の永遠性は、当の永遠性が我々の精神に属するという事実に対する正しい認識にかかっているのである。

感覚され経験される永遠性

ジャケは、『エチカ』における永遠性への認識の段階を大きく三つに分類する。すなわち、表象された永遠性（E5P34S）、感覚され経験された永遠性（E5P23S）、そして判明に認識された永遠性である。ジャケは、上記のうち、感覚・経験されたものとしての永遠性の本性の分析を通して、永遠性への意識がいかにして高まっていくのか、そのメカニズムを明らかにしようとする。

この永遠性の感覚・経験の地位は微妙である。モローが明らかにした通り、『エチカ』において経験は証明の正しさを強調し説得力を増すために用いられるものの、十全な認識の代わりにはならない。経験を通した知識は有効性と限界を持ち合わせているのだ[8]。それゆえこの永遠性の経験は十全な認識ではなく、理性にも直観にも還元することはできない。とはいうものの、E5P23S を見る限り、スピノザはこの感覚・経験が知性の秩序から生じるものと考えているようでもある。

そこでジャケは、このような感覚ないし経験を、理性的認識を通して生じる、いわば永遠性の

[8] Moreau, P.-F. [1994] Spinoza L'expérience et l'éternité (Paris: PUF) pp.227-305

自覚のプロセスとして捉えようとする。まずジャケは、永遠の「感覚」と「経験」がそれぞれ、知的な「目（視覚）」と「観察」に対応するものとして提示されていることを指摘する。すなわち、感覚するとは精神の目、つまり証明を通して見ることであり、また経験するとは精神の目、つまり証明を通して観察することに他ならない。この感覚と経験の間には、本性上の根本的な差異はない。ただ、ここで言う観察は、注意して繰り返し見ることを含意するものと考えられる。つまり、永遠性に対して、精神がどれだけ注意を向け意識しているかという程度の差によって、この二つは相互に区別されうる。精神が最高度の永遠性の意識のレベル、つまり永遠性の判明な認識に到達するためには、証明を通して、永遠性が自己の精神に属するということの経験それ自体を注視する必要があるのだ。

証明と精神の永遠性の間にはどのようなつながりがあるのだろうか。証明とは、一から他へと演繹された十全な諸観念の秩序ある連鎖である。これら十全な諸観念は我々の中にあって確実性という感得 sentiment を生み出す。この確実性とは、自らが知っているということを知っている、という反省的な感得であり（TIE34）、厳密には、観念そのものと同一である（TIE35）。証明が正しいとき、真理が真理と虚偽の規範であるというそのことのみによって、精神はその証明が正しいという事実を知る（E2P43S）。

永遠性の感覚とは確実性の感得を通して得られるものである。この確実性とは、我々自身が永遠であることの確信に他ならない。それゆえ確実性の感得は真なる観念と区別されず、外的な指標を必要としない。

しかし、なぜ確実性が自己の永遠性の自覚を生み出すのだろうか。ここで確実性が持つ、確実性自身への反省作用に注目しなければならない。確実性とは、精神が真なる観念を有しているという、精神自身による自覚に他ならない。確実性はこの自覚ゆえに、事物のみならず精神自身の認識を含んでいる。つまり、真なる観念が含む確実性は精神をして、精神自身が真なる観念を有しているということを自覚せしめるのである。それゆえ真なる観念を有する精神は自己の永遠性の非十全な経験をする。非十全な、というのは、何らかの真なる観念を一つ持てば自己の永遠性が完全に認識されるというものではないからである。真なる観念の連鎖である証明の手続きを通して、この経験は徐々に永遠性の判明な認識へと近づいていく。真なる観念は無限知性の一部であり、永遠である。我々がそれを有するとき、我々は永遠な何ものかが自己の精神の中にあることを感じる。単一の真なる観念が与える永遠性の感覚は微弱なものであるが、精神の中にある諸観念が知性によって秩序付けられ証明へと組織されていくにつれ、この感覚は強力なものとなっていく。言い換えると、精神は知性の秩序によって結び付けられた真なる諸観念の連鎖全体の永遠性を感覚する。

永遠なものの中に何かがあるというだけでなく、自己自身が永遠であるということを知ること、これが自己を意識することに他ならない。ある事物の観念を持つだけでなく、その観念は原因としての自己の観念を伴っている。このような自己意識の度合は人によって異なるものの、この感覚を全く欠く人間はいない。人間精神は所与としての真なる観念を持っているし、確実性の感得は「誰でも経験できること quod quisque potest experiri」（TIE34）だからである。それゆえ各人は

その理性の力能に応じた真なる観念を持っている。言い換えれば、各人は自己の力能に応じて確実性を感じ、自己自身の永遠性の経験をしているのである。

人間精神の永遠性の意義

さらにジャケは、以上のような永遠性の経験が真なる認識それ自体の基礎であると主張する。すなわち、精神が永遠の相のもとにものを知覚できるのは、知性や認識対象それ自体が永遠だからである。

「事物をある永遠の相の下に知覚することは理性の本性に属する」（E2P44C2）

第二種認識は、精神の永遠性があってこそ生じる。理性知は事物を必然的なものとして観想するものであるが、この必然性は神の永遠な必然性そのものである。また理性知の基礎は共通概念であるが、共通概念は何ら時間との関係なしにある永遠の相の下に考えられなければならない。事物や共通概念は永遠なものであり、さらに精神それ自体も永遠でありかつ共通概念を有している。そして第三種認識もまた永遠の相の下の認識であり、精神の永遠性に依存している。事実、「第三種認識は、永遠である限りにおいての精神をその形相的原因とする」（E5P31Dem）とも言われている。それゆえ精神が永遠であることが、精神による永遠の相の下での認識、つまり第二種認識および第三種認識のために必要な基礎であるといえる。

そして第三種認識は、永遠性の認識へと進むのではなく、むしろそこから生じるものである。永遠性の経験からその判明な認識へと進む精神による意識の上昇は、あくまで第二種認識の内部において存在するのであって、第三種認識は最高度の理性知と、それに伴う永遠性の最高度の認識から生じるものである。第二種認識による真なる観念の連鎖によって、精神は少しずつ精神の永遠性を自覚していく。この自覚は、その観念の連鎖を有する精神が、それら諸観念の原因である（それらの内に原因の認識として含まれる）ということによって生じるもの（感覚・経験）である。

おわりに

これまでの議論をまとめると、次のようになる。『エチカ』の永遠性定義は、無時間性や永続性といった概念を含んでおらず、それゆえ実体にも様態にも適用可能である。事実、永遠性は共通概念であって、実体や無限様態のみならずあらゆる有限様態にも含まれている。この永遠性は、精神が十全な認識を獲得するにつれて、それだけ精神の中で大きな部分を占めるようになる。そして十全な認識が含む確実性を通して、精神自身によって意識される。さらに十全な認識は永遠の相の下の認識と呼ばれるが、精神が永遠であるのでなければ、そのような認識は不可能だっただろう。それゆえ精神の永遠性は、十全な認識の基礎でもある。

本著作は、スピノザの永遠性概念を無時間性か永続性かという二者択一から救い出すことで、永遠性の研究に新しい可能性を示している。また、永遠性を共通概念や確実性といった概念と結

びつけて解釈することで、永遠性概念をスピノザ認識論の中に位置づけ直す。そして有限様態の永遠性というスピノザ哲学における大問題の一つに対し、きわめて説得的な解釈を与えるものである。それだけでなく、第二種・第三種認識のための基礎という地位を認めることによって、精神の永遠性に認識論的な意義を与えるものである。これらの点において、本著作は大きな意義を有しているものと思われる。

（こたけようすけ　哲学哲学史・博士後期課程）